



Title	台風18号被害復旧後に実施した特別開園について
Author(s)	加藤, 克
Citation	北大植物園研究紀要, 17, 87-89
Issue Date	2019-05-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74551
Type	departmental bulletin paper
File Information	BBG87-89.pdf



台風 18 号被害復旧後に実施した特別開園について

加藤 克ⁱ

はじめに

2004 年 9 月 8 日の台風 18 号により、北海道大学植物園は大きな被害を受けた。入園者の安全が確保できないために臨時閉園としたが、復旧作業にあたっては研究資源の収集も目的としたために作業に時間を要し、当年の夏期開園を見合わせるようになった。これに対して、市民やマスコミから復旧状況や開園再開に関する多くの問い合わせを受けた事もあり、同年 11 月 1 日から 3 日にかけて状況説明を兼ねた特別開園を実施した。本編では、この特別開園に関する情報を取りまとめ、今後の資料として報告する。

臨時閉園の経緯

2004 年当時、本植物園では警報の発令や観測された風速に基づく臨時閉園のルールを厳密には定めてはなかったが、台風 18 号の接近に伴い、危険を伴う強風が予想されたことから当初より臨時閉園することと決定していた。通常であれば、強風が収まり、園内の安全確保確認と整備の終了次第開園を再開するが、台風 18 号による被害は大野（2006）で示された樹木被害だけでなく、園路や公開建築物、設備などにも影響がおよぶ極めて大きなものであったことから、復旧完了まで臨時閉園を継続することとした。当日予定されていた保育園の利用をはじめ、翌日以降の予約を受けていた学校単位での訪問についても断りの連絡を入れた。また、台風が通過した翌日からの一般入園の問い合わせや周辺の宿泊施設等からの開園状況の問い合わせについても、期間を定めない形での閉園となる旨を伝えることとした。しかしながら、開園状況や秋期の修学旅行訪問などの問い合わせが続いたため、開園再開に関する一応

の目途を示す必要があった。

開園再開の見通しを立てるにあたって、植物園内で早急な再開を優先するか否か、あるいは可能であるかについて議論を進めた結果、稲川・市川（2019）が示したように、被害の大きさに対する復旧作業の規模と研究機関としての調査・収集活動を勘案した計画が立案されたことから、2004 年度中の残り約 50 日の夏期開園は断念することとし、2005 年度の夏期開園開始日である 4 月 29 日から再開することに決定した。この方針は、植物園の所属部局である北方生物圏フィールド科学センター及び北海道大学の承認を受け、植物園の Web サイト等でも発信したものの、広く認知されるには至らず、マスコミによる被害状況、開園再開についての取材対応が続き、その都度安全を確保して園内の状況を説明する必要が生じていた。また、一般市民からの開園再開や部分公開に関する問い合わせや要望も続いていたため、植物園として年度内になんらかの状況説明をする必要があると判断された。

特別開園の準備

台風から 3 週間が経過した 9 月 29 日に植物園全職員による会議が開催され、状況説明のあり方について議論した。議論の方向性は、(1) 一般市民に対しての被害状況の説明、(2) 開園再開に時間を要する理由の明確化、(3) マスコミ対応を集約させ、職員が復旧作業に専念すること、である。話し合いの結果、以下に示す内容で特別開園と説明会を実施することとなった。

1) 開催時期（11 月 1 日～3 日）

復旧作業及び研究資源の収集は、積雪期に倒木・落枝処理をする必要のある部分を除き、積雪前に処理を終える必要があった。このため、大部分の作業

ⁱ北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園 Botanic Garden, Field Science Center for Northern Biosphere, Hokkaido University, 060-0003, Sapporo, Japan

は 10 月中には終了することを目標とし、その後に特別開園を実施することとした。実施回数は、参加希望者が多数見込まれたことから、各日 9 時、10 時、11 時、13 時、14 時からの 5 回とした。

2) 対象

積雪期に処理をする部分など、全面的な安全確保ができないため、自由散策による見学方式は不可能であった。このため、特別開園は 3 班体制で職員による誘導・案内形式の説明会とし、参加人数の制限を目的とした事前応募の方式とした。開催の通知は植物園及び北海道大学の Web サイト、大学広報室を通したマスコミ各社への連絡によって実施した。

3) 実施内容

(1) 倒木処理が終了した区画と積雪期に実施する必要があるため処理を行っていない区画を案内し、台風の被害状況と復旧の進捗状況についての説明、(2) あえて復旧処理を行わないこととした自然林の今後の調査計画についての説明、(3) 収集したディスク標本など研究資源の意義と活用の方性についての説明を実施することとした。

4) 経過

10 月 7 日に植物園 Web サイトでの募集を開始し、翌日以降、北海道大学の Web サイトでの通知、マスコミ各社による特別開園についての報道が行われた。10 月 19 日までの約 10 日間で 222 件、385 名の応募と 7 件の取材依頼を受け付けた。20 日から開催案内と日時、班分けなどを行い通知はがきを発送した。

特別開園当日

参加者に対して、台風被害の大きさと復旧作業内容、また植物園が植物や空間をどのような目的で管理しているのかを理解しやすくするために、解説用の A3 用紙二つ折りの説明資料(図 1)を作成した。内容としては、台風直後に植物園近傍のホテルであるロイトン札幌の協力を得て撮影した植物園の台風被害状況の俯瞰写真、台風翌日の被害状況の写真、台風前の園内の様子を示す写真とともに、自然林の攪乱とその後に予想される遷移の模式図、採集したディスクの年輪解析の目的や樹木の構造を示す図などを掲載したものである。また、3 日間、各日 5 回、3 班体制ののべ 45 回の解説にばらつきを生じさせ

ないよう職員用の解説テキストを作成し、全職員で共有した。案内にあたる職員はこの解説テキストをもとに事前練習を行った上で当日の解説を実施した。

特別開園日の参加者は 328 名にのぼり、その多くは植物園における台風被害の状況に関心をもって参加されていた。職員は安全確保を最優先に誘導しつつ園内を案内し、被害状況や植物園の今後についての解説を行った。参加者からの感想の多くは、台風被害の大きさを実感するとともに、大学植物園として今後果たしてゆくべき役割についてよく理解できたというものであり、所期の目的は達成できたと考えられた。また、マスコミ各社による特別開園の記事を通じて、冬期開園(温室のみの開園)は例年通りで、2005 年 4 月 29 日より夏期開園が再開されることも周知することができた。

まとめ

台風被害に対する復旧作業と並行して特別開園の準備を実施したため、10 月中旬から職員の業務量は増加した。しかし、特別開園の実施にあたって大きな混乱は生じなかった。これは、植物園において公開講座を定期的の実施し、参加者の受付方法や解説資料、テキストの準備などの経験が蓄積されていたことが反映されたものと考えられる。あわせて、植物園内の記録写真など、業務に必要とされる情報を定期的に記録保存していたことで、台風前後の比較などが可能となった。これらの継続的な活動が、突発的な特別開園を効果的に実施できた理由といえよう。また、公開施設として、日常的に受付業務や問い合わせ、荷物預かり、マスコミなどの対応に熟練していたことで、特別開園の実施にあたって必要とされる細かな対応への準備ができていたことも効果があった。これらの対応については、植物園の職員だけでなく、土曜日・日曜日の受付業務に参加し、対応を経験していた北方生物圏フィールド科学センターの事務職員(異動し他部局に在籍している職員を含む)の協力を得たことでより効率的に実施できた。

今回の台風被害に関わる特別開園のような事例は今後頻繁に生じるものではない。一方、植物園における企画展示や公開講座などの対応は、植物園にお

いては日常的に実施されるものである。これらを効果的・効率的に実施するために、管理する樹木の毎木調査や導入植物の記録管理などの継続的な処理、最新の研究動向を踏まえた植物情報の蓄積と質の向上、また園内景観の継続記録調査や変更履歴の保存

など、発信すべき情報の蓄積と整理は欠くことができない業務である。対応の必要が生じる都度に収集や探索をするのではなく、常に利用できるようにしておくこと、あわせて常にブラッシュアップし続ける姿勢を継続してゆく必要がある。

引用文献

- 稲川 博紀・市川 秀雄. 2019. 2004年台風18号による被害樹木の処理と利活用. 北大植物園研究紀要, 17:75-86.
大野 祥子. 2006. 平成16年台風18号被害調査報告. 北大植物園技術報告・年次報告, 4: 2-17.

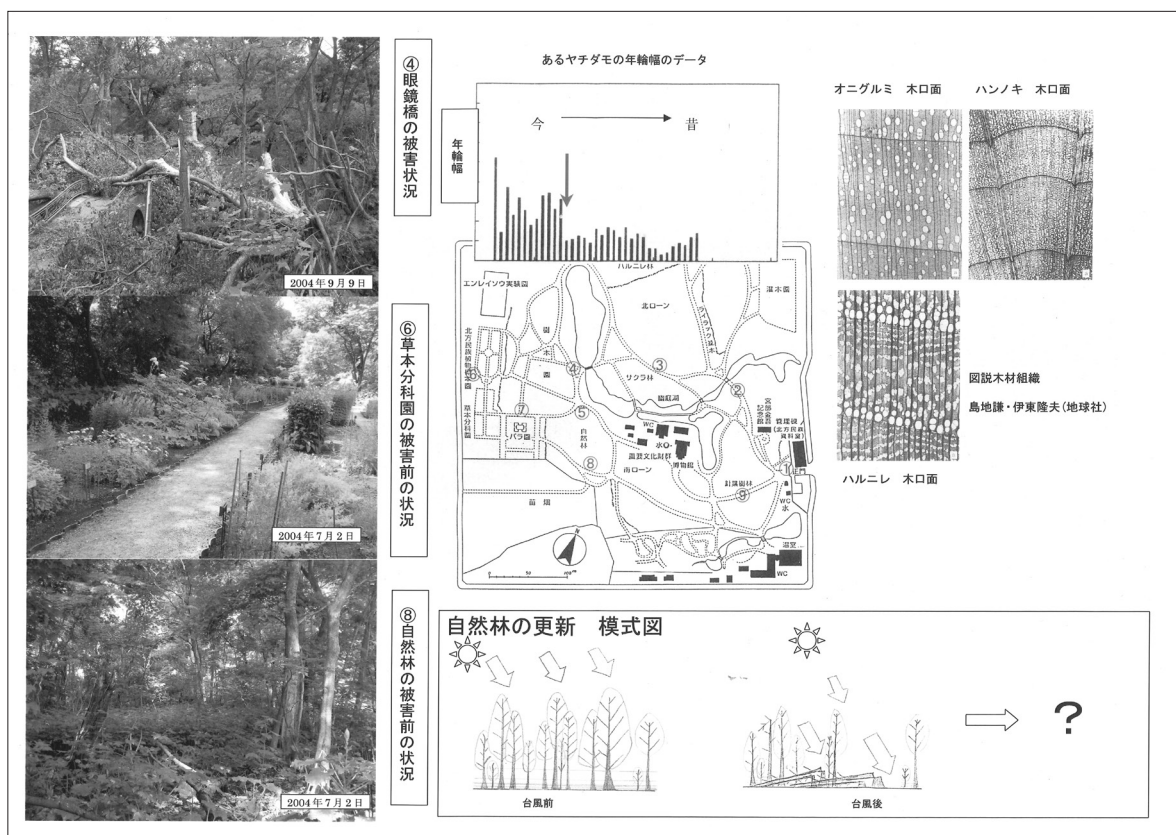


図1. 参加者に配布した資料(上). 資料表紙(下)

